こうほうショッキング Vol.29

Kōhō shocking

細井（ほそい） 尉佐義（いさよし）さん

●プロフィール

39歳。長崎県佐世保市（旧北松浦郡鹿町町）出身、現在上対馬町古里在住。高校卒業後上京し5年間働いた後、C・W・ニコル氏が自然分野の人材養成を提唱して設立した東洋工学専門学校（現東京環境工科専門学校）に入学。在学2年間で様々なフィールドワークを学ぶ。実習地屋久島で知り合った一本釣り漁師の考えに惹かれ、漁師になることを決意。卒業後3年間山について学んだ後、一本釣り漁師として永住の地を探し、10年前対馬と出会う。1年間の定置網漁を経験したのち一本釣り船で独立。愛船は「海子丸」。一番の親友でもある妻と２児の４人暮らし。

○会社員の後、このような学校に入られたきっかけは？

いろいろ夢もあって上京して。でも目指す方向が分からなくなっていました。きっかけは交通事故。バイク事故で入院している時、差し入れてもらったアウトドアの雑誌にニコル氏が作った学校のことが載っていて。学校設立から3年目でした。会社を辞めて、貯まったお金で日本や世界を巡って自分のしたいことを探そうかと思っていた時だったんです。バイクで回ろうと。でも事故でバイクが廃車になって（笑）。どうせお金を使うならもう一度勉強しなおすのもいいなぁと思って。貯金はすぐ底を尽いて、風呂もないようなアパートに住んでました。近所の４分１００円のシャワーで汗を流し、浮いたお金で当時発売されたばかりの発泡酒を飲んで。貧乏なりに楽しんでましたね。

○対馬を選んだ理由は？

一本釣りで生計をたてられる漁場と、来たときの印象、対馬の生態系。魚だけでなく鳥や植物も好きなので。実は妻が専門学校の一つ下で、卒業後に知り合い意気投合して永住の地を探そうと。二人で四国や五島も訪ねてみたのですが、妻も対馬が良いと気に入ったので決めました。経済的な豊かさや利便性なら東京が良かったですが、そこにはないものが対馬にはあると思います。生計は厳しい面もありますが、豊かさの指標をどこに置くか、ということではないでしょうか。それに、島民気質と言うか、人間性も他の場所に比べると気に入った点でした。

○海からの視点で対馬を見る時に思うことは？

資源を守っていこうという機運は盛り上がってきてはいますが、その成果が見えるのにはもう少し時間がかかるし、そうすると枯渇の早さに追いつけない。それぞれの生活がかかっているわけですから、難しい問題ですよね。でも暗いほうを見るばかりじゃなく明るいほうを見ていかなくちゃ。固定観念にとらわれないで何かアイデアがあるんじゃないかと思うんです。漁業者だけでなく、業種を越えた人やモノ、様々な横のつながりができたら、対馬というブランドが生きてくるんじゃないか。この島にしかないもの、この島だから出来ることが何かあるんじゃないかと思うんです。

個人的には今回、海上バードウォッチングも始めたんです。対馬は海の上にも珍しい鳥がたくさんいるんです。資格も取ったので、そういうツアーも企画していきたいですね。いろんな角度からアピールして、それが漁業者と消費者をつなげるパイプの一つになるかも知れないから。自分がここで漁師になった役目も一つはそのあたりにあるんじゃないかと思うんです。

○今の仕事を通して今後に期待することは？

先人達が海からもらった喜び・感覚を次の世代の子ども達にも味わってもらいたいと思います。自然保護という感覚ではなく、自分達が喜んで接することができ、その上で経済活動にも利用できる自然環境を次の世代に残す手伝いができるといいな、と。漁業をしながら横のつながりの中でいろんな取り組みができたらと思います。

毎回、登場してくださった方に次の方をご紹介いただくこのコーナー。次回は豊玉町糸瀬在住の阿比留恭二さんです。お楽しみに。